冬、四国旅行記
誰もやらぬ大冒険

高校 K.T

1.事の始まりは、骨董市だった。
ある店で、面白いものを見つけたのである。 それは何であろう柳行李という和製トランクであった。適当なお金を支払い、次の旅行にこれを用いようと考えた。僕のプリンシプルは、単なる旅行でも、大きな価値や大いなる経験を得ようと考える少々欲張りの心であった。そして旅行当日、トランク1つと適当な手提げを下げ、半世紀遅れた男が小田原駅に現れた。案の定、部員の反応は驚きの声が多かった。その上、防寒対策のため、パキスタン製パコール帽を持ってきたと言うこともあったためでもあろう。8時20分ごろ小田原駅に列車が入線、トランクを網戸に乗っけ、いくつかの遅延もありながら、ある駅でトイレ休憩に出た時間には多分余裕があった。しかし、トイレから出てプラットホームにたどり着いた時にあったのは閉ったドアとそっけない車掌の言葉だった。

2.列車はある部員のおかげによって、トランクだけは、かろうじて列車に乗っていたものの、持ち主が置いてきぼりにされた。落胆したもののすぐに連絡を取り、さすが鉄研と言う素早い対応のおかげで、スマホを見たり、宙や空を見上げたりしながら揺られ、 浜松駅で合流した。その後も、環状線や南海鉄道やフェリーに乗った。しかし、1番旅行者とも言うべき格好をしていたのは僕だったであろう。冬だから、帽子はとても役に立った。

3.四国上陸後、乗り遅れそうになるトラブルがありながらも一行は土佐高知藩の中心、高 知に着いた。ここで班ごとに観光をした。路面電車がギイギイと叫びあげるブレーキ音はそこで生きる人々の陽気で豪快な性格とカツオのたたきの旨さとは似ても似つかなかった。窪川も印象的だった。列車は出発まで時間があった。近くのレストランでテイクアウトした手羽先唐揚げを噛み締めながらその油の温かさを四国の寒さと対照的に手に感じた。列車に揺られて数時間、途中停車駅でみんなで雪合戦をしたり、夕食の計画を立てたりした。クリスマスだったこともあり、顧問に内緒である種、子供の頃に誰しも味わう秘密の会合のように、心を脇躍らせて割り勘でチキンやピザ、ケーキを持ち寄り、クリスマスパーティーをした。多くのメン バーが家族の可否を問わず、仲良く、温和に過ごすイブやクリスマスを犠牲にしてやってきた鉄道好きの猛者たちはコップに注がれたシャンメリーで乾杯して夜　を過ごした。しみじみと、ソーダの刺激を舌に打ちつけて、最後の目的地に思いを巡らせた。翌日、　松山を訪れた。坊ちゃんの臭いは漂わない松山はアンニュイ感じで、あまり、坊ちゃんの真っ直ぐな、みずみずしい感じがせず、がっかりした。高松へ寄り、忙しい1日だった。

4.旅の最後を締めくくるのは寝台 列車の大横綱サンライズ号であった。狭いノビノビ座席に横になると、深く息をつき、外を見る。しかし、あまり見る気にならず、ミニラウンジに行った。その眺めが良　かった。竣工から35年の節目を迎えた瀬戸大橋を渡り、辺りのコンビナート群の魅せる人工的なファ ンタジーに酔いしれた。サンライズのゴーという音も気のせいかマッチしたように感じた。

5.東京まであっという間に到着し、旅は終わりを告げた。部員の「家に着くまでが旅だ」という誰もが聞き飽きたような陳腐な言葉が聞こえてきた。旅は終わり、家に向かう通勤電車でトランク片手にまだその言葉が頭の中で甘い菓子を食べたときにする反芻が脳内でもなされ、頭じゅうを甘く、ねっとりと駆け巡った。この旅行記は誰かが部誌を手に取って、その中の一つとして読むことだろう。そしていつか他の紙ごみとして僕の活字は消えてしまうかもしれない、それでもこのような旅行記を 綴った

のには訳があることを忘れずにいてほしい。

乗り遅れた後に乗ったと思われる列車。

サンライズ瀬戸号車内(左下は例のトランク)

部員と雪合戦をした江川崎駅。(四国)

高知城(見下げられているようだった。)